

生の大恥なり、成程御尤相待候段、返事有之、男の携はるは、此使取次計なり、其後は男一切不出會法なり、扱日限に離別の妻乗物にて、供女は皆かちにて、く、り袴たすき髪を亂し、又かぶり物鉢巻などし、甲斐々々敷出立、しないを持押寄るなり、門をひらかせ、臺所より亂れ入鍋釜障子あたるを幸に打こはす、其時刻を考、新妻の仲人と侍女郎と、先妻の時の侍女郎、同時に出合、真中へ入様々の言を盡し返す、むかしはさうだう打に、二三度頼まれぬ女はなし、七十年前、八十計のばば有しに、そうどううちに十六度頼まれし杯と語りし、百年以來すきとなし、

〔松屋筆記 八十六〕うはなり、はんにや

又云、宗固うはなりこなみといふは、前の妻の事をうはなりといふ、後添の事をこなみといふ、隨筆

夫故前妻の後の妻を恨たる事をうはなり打といへり、打は鐵杖シモトの事なり、人の怨靈をうはなりとは中古よりいふ詞也、盤若といふも女の顔の事にあらず、祈禱に大盤若經をよむゆゑに、盤若面といひて、鬼女を畫かく事なり云々、與清曰、前妻後妻の事、神武天皇の御歌に見えて、厚顔抄古事記傳などに解あり、うはなり打は寶物集に見え、骨董集に考あり、

〔春波樓筆記〕又曰く、江漢四十を過ぎて後妻を娶るべからず、人四十にしては漸く精氣衰ふ、女子と小人とは養ひがたし、

寡婦

〔伊呂波字類抄也〕寡婦ヤメメ、案

〔物類稱呼一人倫〕寡やもめ俗に後家、又後京にてやまめと云、尾州にてやごめといふ、これらは轉

いふも、遠江にてつぐめといふ、

〔松屋筆記 六十七〕八百孀婦ヤメメ

俚諺に、越後新潟八百八後家ヤゴケといへり、そは新潟は北國の船舶輻湊の地にて、倡婦色を衒ものおほし、皆一女一室を構へ、一人住して客を曳く、そのさま後家所帶の家に似たれば、これを後家と